

(様式) 府立松原高等学校 「学校協議会」 報告書 (第3回)

日 時	平成28年3月5日 (土) 13:00~15:00			
出席者	協議会委員	職名等	学校事務局	校務分掌等
	房 本 晃	社会福祉法人バオバブ福祉会理事	中須賀 久 尚	教頭
	菊 地 栄 治	早稲田大学教授	麦 田 伸 一	首席
	高 橋 実 加	本校PTA会長	伊 藤 あ ゆ	首席
			山 口 裕 子	人権教育主担
			木 村 悠	人権教育主担
	教職員等			
	易 寿也 (大阪芸術大学)・林 茂樹 (摂南大学) 糀 秀章 (校長) 高倉 麻衣・佐藤 智美・田中 貴・大久保 諭・田中 知一 本校40期 卒業生4名			
おもな テーマ	1) 校長挨拶、参加者紹介、学校教育自己診断アンケート 2) インタビュー「集団育成のしくみとしかけ」 3) 協議会委員からの感想・提言			
協議内容 の概略	○校長挨拶、参加者紹介、学校教育自己診断アンケートの説明 生徒アンケートでは新項目「論理コミュニケーション」の肯定回答が学年が進むにつれて増加している ○インタビュー「40期生に聞いてみよう、“〇〇実行委員”の意味」 集団育成のしかけとして「〇〇実行委員」が活躍する場面が多いが、こういった活動に参加する生徒がここ数年で多くなっていることに注目したい。2月の「人権の集い」では100名を超える生徒が人権学習実行委員として事前学習を行い、舞台に立った。それは、なぜか。集団育成という、本校ならではのしかけをさらに推進するために、卒業したばかりの40期生を招いたインタビューで、その理由を考えた。また関わった教員からは生徒たちの「仲間への自信」について述べられた。 ○ 協議会委員、参加者からのご意見、提言			
提言内 容・改善 方策	<ul style="list-style-type: none"> ・たとえば、松原高校といったある枠の中で求められる役割を果たせば良い、というのとは違っている。仲間との関係の中で自己理解、他者理解している。 ・数多い実行委員のなかで、ふたを開けたら同じ顔、ではなく、目的が「目立ちたい」というものであっても、きっかけとなっていることが大事。隣の子が生活をさらけ出している、そういう話ができることに驚きながら、どんな子であっても実行委員をしてほしい。 ・「しんどいこと」を語って伝える信頼関係が丁寧に作り上げられている。 ・卒業式で自立支援生が「忘れないでください」と言ったことに涙し、申し訳なく思う。「優しいチカラ」をつけても、社会がそうになっている。枠でしか考えられていない大人のなかで、そうじゃない状況を作っていくことに期待。 ・18歳選挙権について、高校生が学校でどういうふうに教わりたいと思っているか。 ・「松高マジック」の中身が少しずつ解明されている。自己診断アンケートを見ると3年生の答えが量から質へ変わっている。どんなことでも皆で話し合えば何とかなる、と思っている。その信頼感。けなしたり排除するのではなく「一緒にやったほうがいい」と社会に発信して欲しい。 ・思っていたとおり、(40期生は)育った。チェルノブイリから30年になる。かつては近隣の高校生とともに松原の高校生が主催で発信していた。そのように松高が発信してほしい。 ・倍率が少ないほど、生徒は伸びている。次の学年もそうなる、と予言しておく。 			